「煌く芸術の在り処」

沖縄の素材に拘り丁寧な醸造に取り組むマイクロブルワリーCliff Beer が、画廊の要素を兼ね備え、“クリフガロ”として今春移転オープンした。オーナーの宮城は英国の芸術大学で現代アートを探求し、10 年以上の活動を経て帰沖。そんな宮城の心に響き、クリフガロで現在ささやかに開催されているのが、沖縄で活動を続ける現代美術家・パフォーマー 平良亜弥の個展「あかいやま」である。

店内へ入ると、ふっくらとした優しい印象の“やま”のような赤い稜線が、心地よく眼に飛び込んでくる。紙や布を巧みに操り生み出されたそれらは、ドローイングや裁縫など技法もさまざまであるが、一貫して”何か”を想起させる美しいラインを軸に、平良らしいイメージや願いが展開されている。無論、山を描くことや線で表現すること自体は、平良特有のものではない。それでも、「あかいやま」は、唯一の輝きと存在感を放つ。

では平良らしいとは、いったいどういうことか。これまでの、平良の表現に通底するのは、詩的で繊細な手仕事と言えるだろう。その丁寧な痕跡から、鑑賞者の中で次第にイメージが膨らんでいく、夢幻的な魅力である。作家の主張や問いに包まれる機会というよりは、作品と対峙し自身と向き合う体験とも言える。そんな平良の表現は、繊細がゆえに、頼りなさがつきものだ。しかし、そんな不安を払拭するほどに繊細さを突き詰め、煌きを纏い、ある種の凄みへと辿り着いた。

平良の言葉から、繊細さの源に少しだけ近づくことができた。“あかいやま”のインスピレーションソースは、見過ごすわけにはいかず未だに忘れがたい実体験と、その際眼にやきついた景色のようなものにあるらしい。それらの経験が少しでも“豊かさ”へと誘われるよう、観た者が連想した経験や記憶も“豊かさ”へと導かれて行くようにと、温かい言葉を紡ぎだした。

平良の繊細さの根底にあるのは、世界との優しい関わり方ではないだろうか。これほどまでに優しく布を縫った人、紙にインクをのせた人を見たことがない。平良の眼に映る、人々や山や海や草木はいったいどのような表情をしているのだろうか。作品を通じて、作家の眼差しを追体験する。芸術に触れる醍醐味だろう。平良の作品を通じて、我々は社会との関わり方や接し方について諭され、心が洗われる気持ちにすらなる。芸術の煌きは、本質を貫く作家の作品に宿る。

かつて現代美術家・社会評論家の艾未未は「心の持ち方と生き方が、わたしの一番大切な芸術だとおもう。」と語った。巨大な資本の「アート市場・アート業界」によって「アート」そのものを飲み込まれてしまった現代は、果たして彼女の「一番大切な芸術」を感受できるのだろうか。

本質を貫く作家の煌く「あかいやま」を、美術愛好家や関係者のみではなく、多くの方々に観ていただきたい。　平岡昌也(画家)

平良亜弥 個展「あかいやま」は、8 月 4 日まで沖縄市高原のクリフガロにて開催中。